

義兄と母を相次いで

もう一昨年のことですが、わずか3ヶ月の間に、義兄、母親、姪という3人の身内の死と向き合わねばならないご縁に出あいました。

緊急搬送された義兄を診てくださった医師が、姉と私に告げたのは「今晚を越えられるかどうか」という言葉。何とか、その夜は越えてくれましたが、一進一退を繰り返す日々でした。

それから一週間ほど後のことです。施設でみんなと歌を楽しんでいた母が、急に発熱、そのまま呼吸停止。蘇生措置によって、なんとか自発呼吸を取り戻したものの、私が病院に駆けつけたときは、まったく意識がない状態。握り返してくれない手を握り、「ありがと、もう頑張ることないよ、十分頑張ってきてくれたから……」お念仏を申しながら、静かなみとりの時間が過ぎていこうとしていました。

その場には、姉も、姪2人もいました。ところが、義兄の容態が不安定になっているという連絡が入り、3人は慌てて義兄の病院へ向かいました。しばらくして、入ってきた姪からのメールは「今、お父さんが、力尽きた」というものでした。そのわずか10分ほど後、母もまた力尽きました。

こんなことが起こるのか。寂しき、切なき、戸惑いが、一斉に押し寄せてきました。しかし、その後は、そのことすら味わえないほどの、慌ただしい時間が流れました。

一日のうちに、しかも10分違いで義兄と母がお浄土に参らせていただく、もう、これ以上のことはないだろうと思っていました。しかし、それ以上のことが起こったのです。

んなのに、お母さんなのに……。絞り出されるその声は、そのまま鋭く私の身に突き刺さりました。何もできず、何も言えず、その痛みに焼かれるようにして、ただ一緒に泣くだけでした。

私をよび続ける仏さま

南無阿弥陀仏は、痛みに焼かれるいのちに涙してくださった仏さまです。そのいのちを救える仏になろうと歯を食いしばってくださいました。いつでも、どこでも、どんなのちでも、涙する時間も惜しまれ、あなたを救える仏はここに、必ずお浄土に生まれさせる仏はここに、とよび続けてくださる仏さまです。親鸞聖人は、そんな、私の、姉の、そしてあの子のための仏さまを「南無阿弥陀仏」と告げてくださいました。



この記事は、浄土真宗の施本(せほん)である『拝読 浄土真宗のみ教え』より一章を拝読し、法話として深く味わうものです。
本願寺新報より引用させていただきました

担当はいつも墓地の清掃を手伝ってくださっているマトバさんです。マトバさんが言うには、冬場、木が眠っている間に切っておく方が木の為には良いとのこと。お天気の良い午後、助っ人も頼んで思いっきりバッサリと剪定しましたよ。



「ちょっとやり過ぎたのではないか……」私に不安げに木を見上げてみるとマトバさんがやってきて「こう言いました。」「新芽が出てきてからが勝負です。」「結果的には良い枝ぶりに成長するとのこと。さてさて今後が楽しみになってきましたね。」



最近、墓地の入り口にコケとスミレを植えてくれています。まだ根付くかは分かりませんが、こちらも楽しみです。やっぱり緑があるといいですね。